

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：32702

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12871

研究課題名(和文) オーストリア近代デザインと女性デザイナー：第一次世界大戦前後のウィーンの事例から

研究課題名(英文) Modern Design and Women Designers in Austria: Viennese Design around World War I

## 研究代表者

角山 朋子 (Kakuyama, Tomoko)

神奈川大学・国際日本学部・准教授

研究者番号：70790343

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：1910年代から1920年代のウィーンのウィーン工房の女性デザイナーたちが、テキスタイル、服飾、小物の領域で精力的に活動し、製品デザインのみならずウィーン工房のブランド・イメージの形成に寄与したことを明らかにした。また、ウィーン工房、ウィーン・キネティシズム派の女性たちの作品に、ウィーン分離派による芸術刷新運動の理念と実践の継承を見出した。20世紀初頭のウィーンの女性デザイナーたちの活動から、ヨーロッパにおける近代デザイン、前衛芸術の多様な実態を浮き彫りにした。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

多くの才能が開花した世紀末ウィーンの文脈からオーストリア近代デザイン運動の歴史を紐解き、さらにその1910年代以降の展開を明らかにしたことで、本研究成果はウィーンのデザイン史研究、都市文化研究の進展に寄与する。また、女性デザイナーの仕事に注目することで、デザインの領域におけるジェンダー研究を進展させた。本研究が明らかにした、日用品の消費のみならず、そのデザイン、生産に主体的に関与した女性の姿には、生産者/消費者の区分を越えた「生活者」としての新たなデザイン思考とその実践の可能性が見出だせる。

研究成果の概要(英文)：The women designers of the Wiener Werkstaette (Vienna Workshops) in Vienna from the 1910s to the 1920s worked energetically in the areas of textiles, clothing, and accessories. I pointed out not only did they contribute to product design but also to the formation of the brand image of the company. In addition, the work of the women of the Wiener Werkstaette and the Wiener Kinetismus showed its inheritance of the ideas and practices of the art movement of the Vienna Secession. By investigating the activities of women designers in Vienna at the beginning of the 20th century, I highlighted the diverse realities of modern design and avant-garde art in Europe.

研究分野：デザイン史

キーワード：オーストリア近代デザイン ウィーン工房 ウィーン・キネティシズム 女性デザイナー

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 背景：オーストリア近代デザイン史研究の遅れ

これまでドイツ語圏のデザイン史研究は、ドイツのバウハウスに代表される合理主義的デザインの研究が主流である一方、現在のチェコ、ポーランド等の旧ハプスブルク君主国領を含むオーストリアの動向は検証が遅れている状況であった。そうした中、研究代表者はオーストリア近代デザイン史を専攻し、大学院在籍時は、いまだ通史的研究がなかったウィーンのウィーン工房の全貌を明らかにすることを目的に研究を進め、オーストリア近代デザイン運動の独自性を考察した。博士論文では、ウィーン工房を中心とするオーストリア近代デザイン運動の意義が、芸術性と経済性のはざまでの独自の様式美の創出、ブランド企業の誕生、首都と国家の表象の形成にあったと論じた。

### (2) 動機：女性デザイナーへの注目

博士論文から、装飾、ブランド、経済性といったデザインと関わる様々なテーマが導き出されたが、とりわけジェンダーとデザインをめぐる問題が浮上した。ウィーン工房では1910年代中頃から女性メンバーが躍進し、女性たちによる装飾的なデザインが後期ウィーン工房様式となり、やがてウィーン工房に代表される「オーストリアらしさ」の象徴となる。また、1920年代には、ウィーン工房の女性たちの多くも学んだ美術教育家フランツ・チゼックの下でウィーン・キネティシズム派が生まれた。その主要な担い手は、ウィーン美術工芸学校の女子生徒たちであった。

先行研究において、ウィーン的女性デザイナー、アーティストに関する本格的な学術的検証はほぼなされていなかった。主要なウィーン工房研究では、後半期の女性メンバーは簡潔に触れられるにとどまり、Angela Völker, *Stoffe der Wiener Werkstätte*, Wien 1990では比較的詳細に女性メンバーの作品が分析されていたものの、女性メンバーが集中したテキスタイル部門の記述に限定されていた。ウィーン・キネティシズムについては本格的な研究が始まったばかりであり、女性たちの役割は未検証であった。

こうした現状に鑑み、歴史に埋没した女性デザイナーの作品や活動を掘り起こし、デザイン史上に位置づけることの重要性を認識した。なお、ジェンダー的観点からのデザイン史研究の進展により、研究開始後にウィーン工房の女性たちに焦点を当てた初の本格的文献である、Christoph Thun-Hohenstein u.a. (Hg.), *Frauen der Wiener Werkstätte*, Basel 2020 が出版された。

## 2. 研究の目的

本研究は、いまだ検証が不十分であるオーストリア近代デザイン運動、および前衛芸術運動を牽引したウィーン工房、ウィーン・キネティシズム派の女性メンバーに注目し、彼女たちの活動実態とそのデザイン史上の意義の解明を試みるものである。

20世紀初頭のウィーンでは、諸外国の近代芸術に刺激を受け、ウィーン分離派による芸術刷新運動が始まった。総合芸術の理想を掲げたウィーン分離派メンバーのうち、工芸の領域に関心を抱いたヨーゼフ・ホフマン、コロマン・モーザーは、英国アーツ・アンド・クラフツ運動を手本に芸術家と職人の協同組合であるウィーン工房を設立する。初期はホフマン、モーザーの芸術的理想を反映した美的日用品が生産されるが、1907年のモーザー脱退後はメンバー、デザイン様式、生産領域が多様化し、総じて優美で華麗な装飾的デザインによる日用品が生産・販売された。

先行研究では、1920年代に女性メンバーによる都会的で洗練された服飾品、テキスタイル、小物類がウィーン工房の主力製品となったことが指摘されている。こうした女性たちの活躍の素地は、第一次世界大戦中に形成されたことが推測される。また、女性たちの装飾的デザインのルーツの一つとして、ウィーン美術工芸学校のフランツ・チゼックの装飾形態学の授業が挙げられる。チゼックに着目すると、1920年代前半、彼を指導者に前衛的なウィーン・キネティシズム派が生まれ、その中心は彼の女子生徒たちであった。

このように、ウィーン近代デザイン運動における女性の存在感は、同時代他国と比べ突出している。なぜこうした状況が生まれたのか、そして女性たちがウィーン近代デザイン運動の進展にどのように関与したのかという問題意識の下、過去の研究では「女性たち」として括られ検証が不足している女性たちの具体的な活動内容を調査し、両大戦間期ウィーン近代デザインの実態を明らかにすることを目指した。そして研究を通じ、国家的な転換期にあったオーストリアの社会・文化構造の諸相に接近することも試みた。

### 3. 研究の方法

- (1) ウィーン工房とウィーン・キネティシズム派の女性たちのデザイン活動を、オーストリア（ハプスブルク君主国）史の文脈をふまえつつ、近代デザイン史の観点からヨーロッパのデザイン・芸術・建築運動史の議論の俎上に載せて調査する。特に中心的役割を果たしたと推測されるウィーン工房のマリア・リカルツ、フェリーツェ・リックス、マティルデ・フレークル、ウィーン・キネティシズム派のエリカ・ジョヴァンナ・クリーン、エリザベート・カーリンスキー、マリアンネ・ウルマンの6名を主要研究対象とする。
- (2) 当時のウィーンの応用芸術に関わる制度、組織、社会的環境についての調査を、ウィーン（オーストリア国立図書館、ウィーン市庁舎内ウィーン図書館、ウィーン応用芸術大学）で行い、ウィーンで女性たちがプロのデザイナーとして活動できた要因を考察する。
- (3) 女性たちの制作品と造形的特徴の調査を、ウィーン（ウィーン応用芸術博物館（MAK）、ウィーン応用芸術大学、ウィーン・ミュージアム、レオポルト・ミュージアム）、ニューヨーク（ノイエ・ギャラリー）で行う。また、『芸術と美術工芸』、『ドイツ芸術と装飾』等の芸術雑誌に掲載された作品や批評の調査をオーストリア国立図書館、MAK 図書館で行う。
- (4) 制作品の受容と広がり、販売・発表の場、受容層に注目しながら、主にオーストリア国立図書館でオーストリアとドイツの芸術雑誌、新聞から調査する。国際的影響力をもったイギリスの『ザ・ストゥディオ』も調査する。
- (5) 2020年2月以降、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により上記の研究方法の変更を余儀なくされた。十分な資料収集が困難になったため、主要研究対象を上述の6名の女性たちに絞り込むことを断念し、女性たちの活動全般とその背景の調査を行うこととした。応用芸術博物館、ウィーン・ミュージアム、オーストリア国立図書館、ハイデルベルク大学図書館のデジタル・アーカイブ、データベースを利用して文献調査、作品調査を行った。

### 4. 研究成果

- (1) ウィーン的女性デザイナー養成機関としての、ウィーンの帝国立オーストリア芸術産業博物館附属美術工芸学校の重要性が確認できた。同校は、1900年前後からウィーン分離派や彼らと理念を共有する教授陣が進歩的な応用芸術教育を行ったことで知られる。さらに注目すべきは、同校が1868年の開校以来、女子生徒の入学を認め、一端中止されたが1900年にウィーン分離派の校長就任とともに受け入れを再開した点である。教授であったヨーゼフ・ホフマン、フランツ・チゼックを介した美術工芸学校とウィーン工房のつながりは博士論文でも指摘したことであるが、新たな資料からウィーン・キネティシズムに通じるチゼックの1918年以降の装飾教育の独自性が明らかになった。世紀転換期のウィーン分離派の総合芸術の理念と結びついた同校の創造的な応用芸術教育が、女性たちにも開放されていた意義は大きい。

- (2) 1910年代後半以降、ウィーン工房テキスタイル部門、モード部門、芸術家工房（意匠部門）で、リカルツ、リックス、フレークルをはじめとする女性メンバーにより、多様なプリント生地、帽子、ブラウス、コサージュ、ハンドバッグ、壁紙等が生産されていたことを確認した。アール・デコを先取りするような都会的で優美な装飾性が特徴的であり、装飾パターンは草花、鳥、動物、果物、人物をモチーフにした絵柄から、同時代の前衛芸術の要素を取り入れた抽象模様まで、圧倒的な創造性と多様性に富むものであった。また、女性たちがこうした商品を描いた広告デザインを通じ、メディアを介した会社のブランド・イメージの発信にも関与していた様子が認められた。

- (3) 他方で、女性メンバーが生産に従事したファッション、テキスタイル、小物類は、伝統的な女性の制作領域といえる。1910年代後半からの女性メンバー躍進の背景として、第一次世界大戦中に広く女性の社会進出が進んだ、ウィーンでは美術工芸学校を中心に女性美術工芸家誕生の素地があった、第一次世界大戦下の素材、人材、愛国的風潮がファッション領域の生産を後押しした、という要因を見出した。そこから浮かび上がるのは、女性たちが慣習的なジェンダー観のみならず、同時代の社会的条件に影響を受けながら制作活動に従事し、プロの女性デザイナーとして足場を固めていく様相である。

- (4) ウィーン・キネティシズム派の活動に関しては、チゼックとキネティシズムの担い手たちが、同時代の前衛芸術の表現を引用しながら独自の装飾的造形を発展させた様子を確認した。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により現地調査を行えなかったため、キネティシズム研究は今後の継続課題とし、すでに次の現地調査計画を立てている。

上記(1)～(4)の調査・考察から、第一次世界大戦前後のウィーンで多くの女性がウィーン工房を拠点にプロのデザイナーとして活動し、とりわけ同時代からウィーン・デザインの特徴と認められていた個性豊かな創造性を発揮することで、オーストリア独自の近代デザイン運動の展開を導いた様相が明らかになった。また、彼女たちの創作態度に見られる時代精神との融合、装飾的精神、感性的表現の肯定といった要素は、世紀転換期ウィーン近代芸術の理念と表現性を継承するものといえるだろう。本研究を通じ、いわゆる機能主義、合理主義のデザ

インとして捉えられることが多い「モダン・デザイン」の多元性を提示した。

以上の研究成果をもとに、博士論文に加筆し、『ウィーン工房：帝都のブランド誕生にみるオーストリア近代デザイン史』（彩流社、2021年、単著）を刊行した。また、上記(3)の成果は、2021年にAsian Conference of Design History and Studyにて口頭発表し、その後論文として発表した。キネティシズム研究はまだ進展の余地があるものの、ここまでの研究成果は、デザイン史学研究会編『デザイン史学』に寄せた論文「「ウィーン・キネティシズム」、戦間期オーストリアの前衛：国際的モダニズムの受容と独自の展開」（2018年）、2022年に豊田市美術館他で開催される「機能と装飾のポリフォニー」展図録に寄せた論文「フランツ・チゼックとウィーン・キネティシズム：美術工芸学校の「前衛」」（2022年）にまとめた。

また、幅広い層へのオーストリア・中欧デザイン史研究の成果の発信に努め、『中欧・東欧文化辞典』（丸善出版、2021年、共著）、『マイ・ファースト・リチ 上野リチのデザイン』（青幻舎、2021年、共著）の執筆に加わった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Tomoko Kakuyama	4. 巻 11
2. 論文標題 Acceptance of ornament in modern design: Kineticism and the Vienna Workshops in the 1920s	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Back to the Future, The Future in the Past: ICDHS 10+1 BARCELONA 2018 Proceedings Book	6. 最初と最後の頁 89-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 角山朋子	4. 巻 16
2. 論文標題 「ウィーン・キネティシズム」、戦間期オーストリアの前衛 - 国際的モダニズムの受容と独自の展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 デザイン史学	6. 最初と最後の頁 57-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomoko Kakuyama	4. 巻 4
2. 論文標題 Design and Gender during Wartime - the Vienna Workshops in World War I	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory	6. 最初と最後の頁 42-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 角山朋子	4. 巻 -
2. 論文標題 フランツ・チゼックとウィーン・キネティシズム：美術工芸学校の「前衛」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 機能と装飾のポリフォニー：交歓するモダン	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Tomoko Kakuyama
2. 発表標題 Design and Gender during Wartime: the Vienna Workshops in World War I
3. 学会等名 Asian Congress of Design History and Study (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 角山朋子
2. 発表標題 両大戦間期オーストリアの女性とデザインをめぐる状況：エリカ・ジョヴァンナ＝クリーン クレスハイム便り を例に
3. 学会等名 デザイン史学研究会第36回研究発表会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tomoko Kakuyama
2. 発表標題 Acceptance of Ornament in the Modern Design: Kineticism and the Vienna Workshops in the 1920s (発表確定)
3. 学会等名 10th+1 Conference of the International Committee of Design History and Design Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 角山朋子
2. 発表標題 「世紀末ウィーン」後を追って：制作者としての女性の躍進
3. 学会等名 お茶の水女子大学グローバル湿布研究所・デザイン史学研究会主催シンポジウム「くらしを研究する：衣食住のデザイン学、その方法論」 (招待講演)
4. 発表年 2021年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 角山朋子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 440
3. 書名 ウィーン工房：帝都のブランド誕生にみるオーストリア近代デザイン運動史	

1. 著者名 池田祐子、鶴岡真弓、小池一子、青木陵子、藤野可織、角山朋子、鈴木佳子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青幻舎	5. 総ページ数 192
3. 書名 マイ・ファースト・リチ 上野リチのデザイン	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

<p>中欧・東欧文化事典編集委員会編『中欧・東欧文化辞典』丸善出版、2021年、総ページ数856、担当範囲「ポーランドの近代工芸」、「世紀末ウィーンの芸術とデザイン」</p>
---

## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------